

#### 4 肝細胞癌と肝転移の同時発生を CT で術前に指摘した結腸癌術後の 1 症例

海津 元樹・筒井 光廣\*・佐藤 賢治\*  
親松 学\*・加村 毅\*\*・  
内藤 眞\*\*\*・山本 尚\*\*\*  
高野 可赴\*\*\*

新潟県厚生連佐渡総合病院内科・  
放射線科  
同 外科\*  
新潟大学医歯学総合病院放射線科\*\*  
同 第二病理\*\*\*

症例は 72 歳，男性。68 歳時に S 状結腸癌で手術を受け，外来通院中であった。術後約 3 年 7 ヶ月時の 2004 年 1 月 22 日施行の腹部 CT で S8 S6 にそれぞれ 1 カ所の転移所見を指摘され肝切除の予定となった。術直前の肝 dynamic CT 検査で，S8 は肝細胞癌，S6 は転移の所見であった。AFP は陰性であったが，PIVKA-II は 85mAU/ml と上昇しており，同時多発と診断した。血清学的には HCV 抗体，HBs 抗原抗体陰性であったが，HBc 抗体が陽性であり，B 型肝炎の既感染状態であった。2004 年 3 月 25 日肝切除施行し，病理組織学的にも同時多発であることが証明された。同一肝に肝細胞癌と肝転移が同時発生する症例は非常に稀でありここに報告した。

#### 5 SPIO MRI, CTA において非典型的な画像所見を呈した FNH の 1 例

森 茂紀

信楽園病院内科

症例は 31 才，女性。CT にて偶然に肝 S7 に腫瘤を認めた。US では高エコー。dynamic CT では早期に濃染し，後期では不明瞭。MRI では T1W で低信号，T2W でやや高信号，SPIO 造影では信号強度の低下を認めなかった。両検査にて中心癭痕様線状構造を認めた。angio では，早期に強く濃染し，主に肝静脈より導出された。CTAP で defect となり，CTA は dynamic CT と同様。single level CT にて centrifugal artery より中央から濃染し，緩徐に wash out されたが，一部にコロナ様濃

染を認めた。肝生検を施行し，異常血管を有する線維性癭痕と小型肝細胞過形成を認め，FNH と確定した。CD68 染色で，染まる部と染まらない分があり，SPIO MRI の所見になったものと考えられた。

#### 6 VIBE による多血性肝細胞癌の Double Arterial Phase Dynamic MRI

山本 哲史・加村 毅・高野 徹  
尾崎 利郎\*・根本 健夫・笹井 啓資

新潟大学医歯学総合病院放射線科  
新潟大学医学部保健学科医用放射線技術学講座\*

【目的】多血性肝細胞癌（以下 HCC）と偽病変の鑑別に有用とされている CTHA（肝動脈造影下 CT）での“Corona 様濃染”に相当する像が高速 3D-GRE である“VIBE”での Double Arterial Phase Dynamic MRI で描出されるかを検討した。

【方法】2004 年 1 月から 6 月に Double Arterial Phase Dynamic MRI を撮影された HCC の 12 症例 38 結節が対象。VIBE の撮影時間は 11 秒間で造影前と造影剤到達 10 秒後，30 秒後，150 秒後に撮影した。描出された HCC の大きさと，造影剤到達 30 秒後の後期動脈優位相での“Corona”の有無を調べた。

【結果】大きさととの相関なく 23 結節 64% に“Corona”が見られた。また CTHA と対比した 10 結節中 9 結節に“Corona”が見られた。

【結論】Double Arterial Phase Dynamic MRI で，“Corona 様濃染”を良好に描出できた。

#### 7 CTAP/CTHA の適応と限界

川合 弘一・須田 剛士・福原 康夫  
小林 真・五十嵐正人・和栗 暢生  
見田 有作・青柳 豊・山本 哲史\*  
加村 毅\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器内科学分野  
新潟大学医歯学総合病院放射線科\*